

鍼灸臨床における治効要因の多元性 ～腰痛患者の語りの分析から～

伊東純一¹, 鈴木勝己², 小川貴司³, 荒木誠一⁴

- 1, カナエ整骨院 2, 早稲田大学人間科学学術院 3, 小川鍼灸整骨院
4, 帝京平成大学 地域医療学部

【目的】

報告者は、鍼灸治療における科学的整合性の追求は必要不可欠であると考えているが、患者と治療者の個別性及び文化社会的背景が治療効果に与える影響も重要であると感じている。本研究では、鍼灸臨床における人文社会科学研究デザインによる事例分析を通じ、その治効要因を多元的に考察することを目的とした。

【方法】

2013年12月2日から2013年12月13日まで当院において腰痛に対する鍼治療(左L₄-L₅～左上臀部神経領域に対する electro-acupuncture therapy, 10min, 5Hz)を5回施した男性患者(73歳)1名を調査対象とした。鍼治療中の治療者との対話及び調査対象に対する半構造化インタビューをICレコーダに記録し、トランスクリプト化した患者の語りを中心に分析を試みた。尚、本研究は調査対象との間に調査承諾書を取り交わした上に倫理的配慮がなされている。

【結果】

語りを分析した結果、患者と治療者の個別性及び文化社会的背景が相互的に作用し、鍼の治効に影響を与えている可能性が示唆された。

【考察】

施術中の対話や患者の語りは、患者や治療者が様々な社会的リアリティーの中で生きていることを示している。こうした中にある鍼灸臨床においては、個々の文化社会的背景による多様なプロセスがその治効に影響している。鍼灸臨床研究において、科学的整合性から治効要因を導き出そうとする研究手法は重要である。しかし、臨床場面における言語や行動が包含するディテールを集積した質的研究では、鍼灸の治効に多元的な要素が含まれていることを示している。

【結語】

鍼灸の治効要因は、高いエビデンスレベルによってその検証がなされようとしているが、患者の複雑な背景を孕む臨床場面では治効要因が科学的整合性に収束するとは限らない。本研究では、鍼灸臨床の人文社会科学研究デザインによる多元的治効要因の可能性を示している。

キーワード

鍼灸臨床研究・語りの分析・腰痛・多元的治効要因・人文社会科学研究デザイン